

О. Горошкевич, ст. преподаватель
Львовский национальный университет
имени Ивана Франко, Львов

**ПРОБЛЕМЫ ОТБОРА И СЕМАНТИЧЕСКОГО ОПИСАНИЯ ЯЗЫКОВОГО
МАТЕРИАЛА ПРИ СОСТАВЛЕНИИ СЛОВАРЯ СОМАТИЧЕСКОЙ ФРАЗЕОЛОГИИ
ЯПОНСКОГО ЯЗЫКА**

Обосновываются принципы структурирования словаря, отбора и лексикографического описания фразеологических единиц, рассматриваются примеры различий в составе словника, грамматической форме и семантическом описании фразеологических единиц в разных лексикографических источниках

Ключевые слова: *соматическая фразеология, семантическое описание, лексикографические источники*

O.Horoshkevych, senior teacher,
Ivan Franko National University of Lviv

**THE PROBLEM OF SELECTION AND DESCRIPTION OF LANGUAGE MATERIAL
IN ARRANGING DICTIONARY OF JAPANESE SOMATIC PHRASEOLOGY**

The principles of the dictionary structuring, the selection of the phraseological units and their lexicographical description are substantiated. The examples of distinction in the word-list, grammar form and description of meaning of the phraseological units between various dictionaries are considered.

Key words: *the somatic phraseological units, description of meaning, the lexicographical sources*

УДК 81' 27'42~255.4=521=161.1

江川裕之、講師
タラス・シェフチェンコ記念キエフ国立大学、キエフ市

ロシア語訳三島由紀夫『わが友ヒットラー』における男性語表現

三島は『わが友ヒットラー』は男性を意識した戯曲作品であると自ら述べている。『わが友ヒットラー』は、グリゴリー・チハルトウィシヴィーリ（ボリス・アクーニン）によってロシア語に訳されている。作品の中で男性語表現はどのように使われ、「男らしさ」はいかに表現されているのか、また翻訳においては男性語表現が可能か考察した。

キーワード：ジェンダー、男性語表現、性差、男らしさ

1. 研究動機

日本語におけるジェンダー研究は、日本語ジェンダー学会の活動や多くの研究者によって一定の成果が得られている。また日本語ジェンダー研究の最近の

傾向として、女言葉を役割語として注目し、現代社会ではほぼ消滅していると既定する研究者もいる。現代では女言葉は外国映画や小説などの翻訳での限定的現象であり、現実の日本語とはかけ離れており、さらに翻訳が日本語の女言葉をつくるという考え方である[中村2013]。

しかし意味論の研究者として知られる国広哲弥は、このような考え方に対して言語学的常識からは無理があり、「女ことばは小説以前にすでに広く行き渡っていて、小説はそれを活写したの」であると述べ[国広2007]、ジェンダー表現が現在の事象として使用頻度が低くなったとしても、現実の言語現象から表出されるものであるとして、中村の仮説を批判している。1932年生まれの評論家の樋口恵子が中学生のころは、家庭では父母にも敬語で話し、女子高生時代は「欠席でございます」「ごめんあそばせ」といった言葉遣いをしていたことを回想しているように[樋口2013]、社会や時代の変化によってジェンダー表現の用法や頻度も変化していくことは周知のことである。

小説などに現れるジェンダー表現は、作者個人あるいは言語環境としての社会が実際に得た言語活動を文章表現化したものである。同時に、実際の発話などに比べ、作者が恣意的にその使用を調整することも可能である。特に戯曲は登場人物の会話を中心として読者あるいは観客に内容を直接伝える作品形態であり、ジェンダー表現が顕著に現れやすい。戯曲は、まとまった状況や会話の中でジェンダー表現を評価することができ、ジェンダー表現研究の対象としてもっと注目されるべき研究対象である。

また日本語のジェンダー表現研究は女性語表現に関するものが多く、男性語表現の研究は限定的であり男性語表現のより深い考察が、ジェンダー表現研究の発展には欠かせない。加えて日本語の原文を翻訳と比較することで日本語と外国語のジェンダー表現の特徴が顕著に見て取れるはずである。また日本語とは異なるあるいは似た性格を持つ外国語であるロシア語訳との比較によって、翻訳者が意識的あるいは無意識に日本語原文のジェンダー表現をロシア語に変換している事象が観察できるはずである。

以上のように本研究によって、今まで深く研究されてこなかった日本語とロシア語における男性語表現を考察することで、更なる今後の発展が期待できる。

2. 先行研究

佐々木は言語の性差化を、第一に終助詞「～わ」や「～よ」などの文末表現や「まあ」などの間投詞など、話し手の性にもとづく表現方法を「女言葉・男言葉」とし、第二に「女房」や「女々しい」など名詞や形容詞として日本語に現れるものを「言及対象の性にもとづくもの」として、二つに大別している[佐々木2009, p.506]。日本語のジェンダー表現研究においてはこの二つの基本的な分類を常に考慮する必要がある。本研究では特に男言葉を中心に考察していくこととする。

小川は先行研究をまとめジェンダー表現が現れるのは、「① 終助詞（文末表現）② 呼称（1人称、2人称、3人称）③ 音変化（促音化・長音化・音便化）④ イントネーション⑤ 語彙（副詞、「お」、～じゃん・奴・食う……）⑥ 文法（主語の欠如、格助詞の欠如・体言止め）⑦ 敬語（ていねいさ）⑧ パラ言語⑨ 聞き手の性別（社会的地位）⑩ その他（呼びかけ、言いよどみ、繰り返し

の表現etc)」であると分類化している。また小川は1996年に首都圏の大学生127名に親しい者同士の会話を録音してそれを文字化、分析し、男言葉に特徴的な文末表現として、「～な、～よな、～ぞ、～ぜ、～よ」などを挙げている〔小川2004〕。また陳は、同様に大学生の会話分析を行い、1) 女性が女性語を使うことより男性は男性語を中心にジェンダー表現を多用する。2) ジェンダー表現が使われやすい環境は目上から目下、もしくは親しい者同士の会話である。3) ジェンダー表現の機能としては起伏のある感情の表現、親密化のストラテジー等があるという考察を行っている〔陳2012〕。これら実際の会話分析調査の結果は戯曲を対象とする本研究にとっても十分考慮する必要がある。

翻訳におけるジェンダー表現は、今後注目されるべき研究対象である。小説などに現れる「様々な人によって行われる会話文は、作家の想像に基づくステレオタイプでしかない」しかし、「会話の運びによってキャラクターを作り出して微妙な人間関係にリアリティをもたせ、読者を引きつける物語を展開することが小説家の仕事」とレイノルズ秋葉が指摘するとおり〔レイノルズ秋葉2012〕、文学作品そのものはファクションであるが、ジェンダー表現を研究する上で実際の会話分析などと比べ優越をつけることのできない対象となりうる。また翻訳との対照研究は、日本語を単独に研究することよりも複雑ではあるが、言語の特徴を顕著に見出すためには有効な手段である。

小原は、日本語からロシア語訳よしもとばなな『キッチン』の性転換男性が使う女言葉の終助詞の考察を行っており、注目に値する。またロシア語から和訳チェーホフの女言葉の終助詞が新しい訳ほど少なくなっているという報告し〔小原2003〕、これは女言葉の使用が現実の言語生活で減少しているという考察を裏付けるものであろう。また江川による三島由紀夫の戯曲『サド侯爵夫人』の女性語表現とウクライナ語訳での翻訳上の表現や技巧を考察した研究は〔江川2013〕、本稿との相関を考察すれば、言語の性差を研究する上で有効な素材となるであろう。

3.研究対象

本研究では、三島の戯曲『わが友ヒットラー』〔三島1979〕とグリゴリー・チハルトウィシヴィーリ（ボリス・アクーニン）によって訳されたロシア語訳〔ミスィマ 2005〕を使って男性語表現の考察を試みた。本戯曲の登場人物はアドルフ・ヒットラー（Адольф Гитлер）（Adolf Hitler, 1889年4月20日 - 1945年4月30日）ドイツ国首相 Reichskanzler、突撃隊幕僚長（SA-Stabschef）エルンスト・レーム（Эрнст Рем）（Ernst Julius Röhm, 1887年11月28日 - 1934年7月1日）、グレゴール・シュトラッサー（Героер Штрацсер）ナチス左派（Gregor Straßer, 1892年5月31日 - 1934年6月30日）、グスタフ・クルップ（Густав Крупп）（Gustav Krupp von Bohlen und Halbach, 1870年8月7日 - 1950年1月16日）重工業会社クルップ（Krupp）会長。彼らは歴史上の実在の人物であり、実際に起きた「長いナイフの夜事件」«Ночь длинных ножей»（Nacht der langen Messer）というヒットラーが主導した粛清を題材としている。題材自体が政治闘争や軍事であり力強いヒットラーの演説や男性だけの会話の中で演劇は進んでいく。

時代設定は第一幕と第二幕は1934年6月中ごろ、第三幕はその数日後で粛清が始まった6月30日の夜半。登場人物の年齢を計算するとヒットラー45歳、レー

ム46歳、シュトラッサー42歳、クルップ63歳となり、登場人物間の親密さや利害関係と共に年齢による言葉遣いの差にも注目される点がある。事象や人物の設定や性格描写、言語表現などは、もちろん三島の創作である。本研究では作品の台詞の部分を対象とし、ト書きなどは対象外とした。

4. 考察

文末が「だ・である」などで終わる普通体（常体）、は一般に会話として用いられる場合は、男性語表現としてとらえられる。主に目上が目下の立場に対して用いるほか、同じ立場の男性たちの親近感を表す言語行為として観察されている。またヒットラーの演説は政治問題を大衆に訴えかけており、演説調の力強い男性的な文体をなしている。これは権力者であるヒットラーが、大衆の意思のある方向へと誘導するアジェンションである。聴衆に対し上から下へ自らの権威を誇示しつつ共感を求め、テーマ自体も政治、軍事、社会であり男らしさを強調した演説である。

4.1. 会話部分

普通体は一般に会話として用いられる場合は、男性語表現として認識されるが、翻訳される過程ではロシア語にはジェンダー表現としては反映されない。ロシア語では、性差ではなく**ты**の文体や**вы**の文体を使って親近差や丁寧さを表している。

日本語原文の普通体を使う場面は次の1) 目上が目下の立場に対して用いる場合と2) 親しい男性たちの親近感を表す言語行為として大きく二つに分かれる。文末表現も「ある」「ない」「だ」など言い切りの表現や、終助詞「ぜ」、「ぞ」、「のさ」さらにそれらの派生形など、また質問や確認などに現れる「か」などの多用が見られる。

4.1.1. 目上が目下に用いる普通体

普通体は年上のクルップが年下のヒットラー、レーム、シュトラッサーにと話す際に使用されている。しかし本作品のロシア語訳では、通常訳出で使われるであろう普通体を**ты**の文体ではなく**вы**の文体を使用して訳出している。例えばクルップがレームに対し「そして君のその、突撃隊の使命は何だね。」[三島1979, 126] は、*А в чем, собственно, миссия ваших штурмовых отрядов?* [Мисима2005, 704] となっている。一般的に丁寧体は**вы**の文体、普通体は**ты**の文体と考えがちであるが、登場人物の中のクルップの役割は、粛清の当事者である他の三人に対して傍観的でもあり批評家的でもある。親近の差や心理的な距離を考慮して翻訳者は**вы**の文体を使ったと思われる。またクルップはレームに対し「レーム君」[三島1979, 121] と呼びかけているが、ロシア語訳では**Милейший Рем** [Мисима 2005, 700] を使い親密化のストラテジーも使われている。

クルップがシュトラッサーに対し「そして君は牛乳愛好家の、健やかな未来に賭けた社会主義か。牛乳色の未来というわけか。やれやれ私はいきていたくないね。」[三島1979, 131] は、*А вы – любитель молока, да? Социалист, ратующий за крепкое, здоровое завтра? За молочное-белое будущее? Нет уж, слуга покорный, по мне лучше умереть.* [Мисима2005, 707] と訳出されている。ここで

はクルップが皮肉をこめて発言しているので確認を得る表現 *любитель молока, да?* は、女性も使用可能でもあるが粗野な表現であり、さらに間投詞 *уж* によってストレートな否定的感情を強めている。

4.1.2. 親しい男性たちの親近感を表す普通体

ヒトラーとレームは同志として普通体の会話をしており、ロシア語訳でもお互いに *ты* の文体を使用して親密さを出している。ヒトラーがレームに対し「ここのところをよく考えてくれ、エレンスト。俺も今晩じっくりと考えよう。」[三島1979, 147]

と述べているところは、ロシア語訳でも *Поразмысли над этим сегодня ночью, Эрнст. И я тоже поразмыслю.* [Мисима 2005, 716] という表現で男性語表現を使っている。

特に注目されるのは第二幕で思想的にも対立するレームとしシュトラッサーの会話と、その訳出である。はじめは丁寧体でお互いに「あなた」「あんた」[三島1979, 165] と呼び合い一定の心理的距離を出しており、ロシア語訳でも *вы* の文体を使用している。レームがシュトラッサーに「あんたが俺の感情をするいわれはないでしょう。」という台詞は *Фу-ты ну-ты, все мои мысли и чувства видит как на ладони.* [Мисима 2005, 727] と訳して嫌味も表現している。

日本語原文ではシュトラッサーによる長い台詞 [三島1979, 167-170] の中で呼称もシュトラッサーもレームも互いに「君」となっていく、文体も丁寧体からこの長い台詞の後は普通体となって微妙な親近感が発生している。しかしロシア語訳では *вы* の文体のままで、この心理的な変化は特に表現されていない。

4.2. ヒットラーの演説部分

全体に普通体を基本としているが、「のだ・である」を使った語尾表現を多用し演説調の力強い男性的な文体となっている。「十八年前を思い出したまえ」[三島1979, 119] は、日本語では男性語表現であるが、訳出において *Вспомните, что было восемнадцать лет назад.* [Мисима 2005, 699] のように特に男性語表現としては訳さず一般的表現になっている。否定形「非国民の寄り集まり社会民主党はおらぬ」[三島1979, 120] も同様に *Нет больше антинародной своры социал-демократов!* と一般的表現として訳出されている。一方、原文訳文共に男性的な演説表現の例としては、「思ってもみよ、諸君」[三島1979, 119] とそのロシア語訳 *Вдумайтесь, господа!* [Мисима 2005, 699] が挙げられる。ともに命令形と呼称を使った大衆への呼びかけは、通常女性は使わない男性語表現である。また「どう思う？諸君」[三島1979, 120] では *Как вам это нравится, а?* [Мисима 2005, 699] ロシア語訳で間投詞 *а* を追加して粗雑な表現を付加している。

宇佐美も「力のある者は、丁寧でないことば使いをしても、「下品」とは見なされないという事実である。それは、「親しみを込めた話し方」となる。」[宇佐美2005] と述べているように、演説においても卑語、罵倒表現の使用は、権力者が大衆との親密化を狙ったストラテジーの一つであるといえる。ヒットラーの「の穴より臭い民主主義は」[三島1979, 120] という台詞はロシア語訳では *и это смрадная демократия* [Мисима 2005, 699] として「悪臭を放つ民主

義」程度に下品さが調整され訳されているが、親密化のストラテジーや男性語表現の観点、文学作品の中で三島が創造したヒットラーの人格描写を考慮すれば、原文に近い訳が必要であったかもしれない。

次に男性語表現に近いものとして考えられるのは、文章の切れのよさスピード感である。日本語原文では「あのころの私は、勇敢な兵士として戦って負傷し、バーリッツの病院にいたが、そこでの煮えけるような思いがしていた」〔三島1979、119-120〕と一つの文章であるが、ロシア語訳ではЯ простой мужественный солдат. Ранен на фронте, лечусь в Беелитцком госпитале. И одолевают меня мысли, от которых все нутро как огнем горит. [Мисима 2005, 699] 演説のテンポを速め、切れのよさを際立たせるために文を三つに分けて、さらに過去形を現在形にして訳している。

5. 結論

本研究の対象である『わが友ヒットラー』の日本語原文では多くの男性語表現が見られた。三島の戯曲『サド侯爵夫人』が、演劇という虚構の中の究極の女らしさを表現したものであるならば、『わが友ヒットラー』は男らしさを強く内包した作品だといえる。本作品の中で男性語表現は、先行研究を裏付けるかたちで、同レベル同士の会話中で多様されること、目上から目下への関係で使用されること、権威者が大衆へ親近を表すためのストラテジーとして使う例などを確かめることができた。

通常、男性語表現をあらわす文末表現はロシア語訳には反映されない。考察した以外にも通常女性が用いない語彙も「諸君」〔三島1979、119〕を вы、「さん」〔三島1979、124〕を он とするなど一般化されてしまう傾向にある。しかしロシア語訳では多くの場合、粗雑さや丁寧さを考慮した訳出など対人的な表現によって男らしさを表現しようとしている。訳出の際にテンポを速め文章の切れを良くするために時制を変更させたり、文章を分割する例も見られた。

今後さらにこの作品を深く詳細に検討し系統立てることでさらに日本語の男性語表現がより明確になるであろう。また翻訳作品のさらなる分析によって日本語と外国語のジェンダー表現の用例を採取、整理分類し、日本語や一般言語学のジェンダー研究に寄与することができるはずである。

使用文献

1. Мисима Ю. Мой друг Гитлер // Смерть в середине лета: Романы, драмы, рассказы. Пер. с яп. Г. Чхартишвили. – СПб.: Азбука-классика, 2005. – С.697–749;
2. 宇佐美まゆみ。ジェンダーとポライトネス—女性は男性よりポライトなのか？— // 日本語ジェンダー学会誌第5号、2005。 — http://www.gender.jp/journal/no5/1_usami.html;
3. 江川裕之。ウクライナ語訳三島由紀夫「サド公爵夫人」における女性語表現 // 日本語ジェンダー学会誌第13号、2013。 — <http://www.gender.jp/journal/no13/1legawa.html>;
4. 小川早百合。話し言葉の男女差 — 定義・意識・実際—女性語表現 // 日本語ジェンダー学会誌第4号、2004。 — http://www.gender.jp/journal/no4/B_ogawa.html;

5. 小原信利。ロシア語と日本語を対照して見るジェンダー観—職業を示す名詞の女性形、男性形と、動詞の「女性形」過去形を中心に—// 日本語ジェンダー学会誌第3号、2003。 —http://www.gender.jp/journal/no3/No3_3.html#C00;
6. 国広哲弥。書評；『日本語とジェンダー』// 日本語ジェンダー学会誌第7号、2007。 —http://www.gender.jp/journal/no7/05_kunihiro.html;
7. 佐々木瑞枝。日本語ジェンダー辞典。—東京：東京堂出版、2009。 —545頁;
8. 陳一吟。大学生の雑談に表れるジェンダー表現の機能 // 日本語ジェンダー学会誌第10号、2010。 —http://www.gender.jp/journal/no10/12_chin.html#4;
9. 中村桃子。翻訳がつくる日本語—ヒロインは「女ことば」を話し続ける。—東京：白澤社2013;
10. 樋口恵子。私の日本語ジェンダー体験。第13回年次大会基調講演要旨// 日本語ジェンダー学会誌第13号、2013。 —<http://www.gender.jp/journal/no13/01higuchi.html#1>;
11. 三島由紀夫。サド侯爵夫人・わが友ヒットラー。—東京：新潮社、1979。 —225頁;
12. レイノルズ秋葉かつえ。村上小説におけるにおける「女ことば」『世界の終わりとハードボイルドワールド』から『1Q48』まで // 日本語ジェンダー学会誌第12号、2012。 —<http://www.gender.jp/journal/no12/05-04-akiba.html>.

Етава Х., ст. викладач

Київський національний університет імені Тараса Шевченка, Київ

ВИРАЗИ ЧОЛОВІЧОЇ МОВИ В РОСІЙСЬКОМОВНОМУ ПЕРЕКЛАДІ ТВОРУ «МІЙ ДРУГ ГІТЛЕР» МІШИМИ ЮКІО

Мишіма Юкіо сам вважає совою п'єсу «Мій друг Гітлер», акцентуючи твором з чоловічим характером. Ця п'єса була перекладна Г. Чхартішвілі (Б. Акуніном) російською мовою. В ній розглядаються такі аспекти: використання виразів чоловічої мови, також, можливості проявлення вирази чоловічої мови при перекладі.

Ключові слова: *гендер, вирази чоловічої мови, відмінність меж полами, мужність.*

Этава Х., ст. преподаватель

Киевский национальный университет имени Тараса Шевченко, Киев

ВЫРАЖЕНИЯ МУЖСКОГО ЯЗЫКА В РУССКОЯЗЫЧНОМ ПЕРЕВОДЕ ПРОИЗВЕДЕНИЯ «МОЙ ДРУГ ГИТЛЕР» МИСИМЫ ЮКИО

Мисима Юкио сам считает свою пьесу «Мой друг Гитлер», акцентирующим произведением с мужским характером. Данная пьеса была переведена Г. Чхартішвили (Б. Акунином) на русский язык. В ней рассматриваются такие аспекты: исполь-

зование выраженный мужского языка в пьесе, также, возможность проявления выраженный мужского языка при переводе.

Ключевые слова: *гендер, выражения мужского языка, отличие между полами, мужественность.*

УДК 811.521

О. Кобелянська, канд. філол. наук
Київський національний університет
імені Тараса Шевченка, Київ

ЛЕКСИЧНІ ПОВТОРИ ТА ОНОМАТОПИ-РЕДУПЛІКАТИ В МОВІ ЯПОНСЬКОЇ КЛАСИЧНОЇ ПОЕЗІЇ VIII–XX СТ.

Основною метою дослідження є встановлення кількісних показників, а також визначення головних художньо-стилістичних функцій лексичних повторів і ономатопів-редуплікатів у мові японської класичної поезії VIII–XX ст.

Насамперед у дослідженні чітко розмежовано поняття «лексичний повтор» і «онматоп-редуплікат», з'ясовано ключові цілі їх активного залучення до японських поетичних творів VIII–XX ст. Окрему увагу приділено визначенню художньо-стилістичних функцій лексичних повторів і онматопів-редуплікатів у японській класичній поезії жанрів танка та хайку.

Основним матеріалом дослідження послужили поетичні твори у складі історико-міфологічного літопису «Коджікі», антологій «Ман-йо-шю», «Кокін-шю», «Шінкокін-шю», а також окремі вірші-хайку таких відомих майстрів цього поетичного жанру, як Мацуо Басьо, Кобаяші Ісса, Масаока Шікі, Танеда Сантока та ін.

Ключові слова: *лексичний повтор, японська онматопея, онматоп-редуплікат, танка, хайку, художньо-стилістична функція, японська класична поезія*

I

Уже в самій назві нашого наукового дослідження міститься дихотомічне протиставлення різногалузевих понять: «лексичний повтор» як художньо-стилістичний засіб відноситься до сфери поезики та літературознавства, тоді як «онматоп-редуплікат»¹ є суто лінгвістичним терміном. Проте навіть побіжне знайомство з історією японської класичної поезії, зокрема з практикою використання в поетичних творах (особливо на ранньому етапі її розвитку /VIII–XV ст./) лексичних повторів як досить частотного художньо-стилістичного засобу, а також активне залучення до поетичних текстів поетами пізнішої історичної доби (XVI–XX ст.) онматопеїчної лексики редуплікаційного типу, яка поступово перебрала на себе практично всі функції лексичних повторів, дає нам всі підстави для компаративного аналізу цих мовних одиниць і їхніх функцій на матеріалі японської класичної поезії. Йдеться насамперед

¹ Зазвичай, редуплікацією вважається подвоєння кореневої морфеми, що може вживатися як самостійно, так і входити до складу інших (похідних від онматопеї) слів, наприклад: ちらちら [чіра-чіра] – «миготяти», «мерехтяти»; похідні слова зі схожим значенням: ちらっと [чіратто], ちらと [чірато], а також дієслово ちらつく [чірацуку] – «миготіти», «мерехтіти»; «іскритися».